

## 留学に至るまでの経緯

2020年6月30日

立石泰佳

このたび船井情報科学振興財団の奨学生として採用していただきました、立石泰佳（たていし やすか）と申します。専門は経済学で、特に開発経済・政治経済を中心に学んでいます。東京大学を卒業後海外で修士号を取得し、現在はワシントン DC にある世界銀行でコンサルタント<sup>1</sup>として勤務しています。大学入学当初から国際開発に興味があり多くの海外経験を積んできましたが、実は博士課程への進学を意識し始めたのが修士課程入学後と遅く、さらに途中で専門を政治学から経済学へ転向しています。典型的な経済学での PhD 留学とは歩んできた道のりも目的も多少異なりますが、この報告書が留学を目指すどなたかの参考になれば幸いです。

\*\*\*\*\*

### 自己紹介・これまでの経歴

私の専門である開発経済学は、国家が経済発展に至るメカニズムを解き明かし、発展途上国のための政策・戦略を考える学問分野です。2019年のノーベル経済学賞が当該分野の研究者に授与されたことでも近年注目を集めているかと思えます。私は特に仏語圏アフリカに関心があり、紛争をめぐる経済、具体的には戦闘参加の要因となりうる貧困や、紛争後の短期的・長期的な経済活動への影響などを、マイクロデータを使って実証的に分析したいと考えています。

開発経済学という学問領域には東京大学入学当初から関心があったのですが、経済学 PhD の取得を志すまでの道筋は紆余曲折を経ています。私は元々経済学というディシプリンよりも国際開発というトピックそのものに興味があり、学部2年次での進学振り分けでは教養学部・国際関係論コースを選択しました。国際関係論コースでは社会科学の課題を様々な角度から検討し、多角的な視野を持つ訓練を受けました。振り返れば経済学とは関係ないものも多く学びましたが、分野横断的な視野、特に国際政治学の視点を持ち合わせて研究の問いを考えるようになったのは、ここでの影響が大きいように思います。

国際開発に実務の面から関わりたいと考えていたこともあり、学部卒業後には London School of Economics and Political Science (LSE) の MSc Development Studies へ進学しました。しかし大学院で過ごすうちに学問的な知見を直接活かせるような形で国際開発に携わりたいという思いが強くなり、経済学を本格的に学ぶことを決意しました。実は学部生の頃から経済学部のゼミに参加し、イギリス留学前の1学期間は東京大学の経済学研究科に所属するなど、開発経済に関しては多少の下地があったのです。2018年夏からは拠点をアメリカ東海岸に移し、Yale大学の MA International and Development Economics (IDE) に在籍。結果的に1年間の修士課程を2つ修めることになりました。ちなみに学位名が似ているものの、LSEでは開発学（主に第二次世界大戦後の国際開発の潮流を文献から学ぶもの）、Yaleでは経済学（マクロ・ミクロ・計量経済学）を学びました。

---

<sup>1</sup> 国際機関では職位名として Staff と Consultant があり、それぞれ正社員・契約社員に該当します。コンサルタントの業務内容も部署によって大きく異なりますが、私は Poverty and Equity Global Practice という部署に所属しており、ここではエコノミストが途上国のマイクロデータを使って貧困分析をする際のリサーチアシスタントのような仕事が多いです。

## PhD 出願の動機

開発経済学をより深く学びたいと考え、PhD への進学を見据えるようになったのは、ガーナでの国連インターンの経験が契機となっています。私は学部3-4年次にフランスのパリ政治学院に交換留学をしたのですが、その時の奨学金制度を利用して夏休みに2ヶ月間、ガーナの首都・アクラにある World Food Programme (WFP) の事務所でインターンをする機会に恵まれました。このインターンでは余剰作物の買付プロジェクトの評価 (Monitoring & Evaluation) に関わり、農家からの買い付けデータを分析してその傾向等を報告書にまとめました。実際に農家を訪れて現場の様子を知ることができる貴重な機会ではあったものの、大学での学びが必ずしも実務には直結するわけではないということを実感する場でもありました。一方で、自分が開発経済学をより深く学んでいけば、評価方法などについてより実質的な提言ができたのではないかと思う場面もありました。私にとってガーナでのインターンは、実務で生きる専門性としての開発経済学を意識するようになった原点です。

そのような経験を通して、国際機関や NGO にはエコノミストと呼ばれる職業があり、経済学の知見を活かし途上国政府や企業にアドバイスをしていると知り、将来の選択肢として強く惹かれるようになりました。国際機関でのポストを狙うには修士号が最低条件であることが多いですが、エコノミストに関しては博士号を取得している経済学者が多く、修士課程だけでは付加価値として弱いというのが実情だと思います。実際に現職で関わりのあるエコノミストの中には、経済学者として世界銀行で得られるデータを活用した上で論文を発表する方もおり、大学でのポストと類似点も多い職位だという印象を持っています。もちろん、修士課程で研究した紛争の経済分析というテーマをより掘り下げたいという思いが一番の理由ではあったのですが、キャリア上の目標のためにも博士課程への進学を決意するに至りました。

## 経済学での PhD 留学

冒頭で私の経歴は経済学 PhD 進学者としては典型的ではないと記しましたが、現在日本人で経済学 PhD 留学をする方の多くは国内で修士課程まで進み、RA・TA の経験を積んだ上で進学するというケースが多いように思います。一方で、私は海外の修士課程を修了し、さらに国際機関での職務経験も得た上で PhD を始めようとしています。これまでの船井財団の奨学生で経済学専攻の方はほとんど国内の大学で修士課程を経由してから留学していらっしゃると思うので、そちらの道筋を辿る場合のノウハウは先輩方の報告書にお任せし、以下では私自身の経験を記させていただきます。

実は私は海外の博士課程に出願するのは今回が3度目で、初めて合格をいただきました。失敗に終わった初めの2回と3回目では出願先の大学、研究実績、推薦者、奨学金の有無など全ての要素が大幅に違うので何が合格にとっての決め手だったのかは分かりません。ただ、応募書類の準備にあたっては、出願の際に競争相手の多くが pre-doc RA (後述) を経ていることを想定して、論文発表の実績や、現職でのリサーチ経験などを強調することで彼らと遜色ない業績があるというように自分をブランディングすることを心掛けました。

海外の経済学 PhD は年々応募数が増え狭き門となっています。特に私が専門としている実証系の分野では Predoctoral Fellowship (通称 pre-doc<sup>2</sup>) というフルタイムの RA として研究経験を積み、著名な先生に強い推薦を書いてもらうという流れが一般的になりつつあります。現在アメリカの経済学 PhD に進学するためにはこのようなプログラムを利用するのが一番確実な方法だと言われるものの、最近では pre-doc を経た人でさえもトップスクールへの合格は難しくなっているようです。さらに、pre-doc 自体も年々枠が増えているとは言え、1つのプロジェクトにつき数人しか採用されないこともあり、ポストによっては倍率 300 倍以上と非常に競争が激しいと言われています。私自身 Yale を卒業する際に応募<sup>3</sup>し続けましたが、オンライン面接に呼ばれたのが 5 つ、writing sample や coding test 等を経て最終面接まで進んだのが 3 つほどで、最終的にはどこからもオファーを頂けませんでした。

しかし、同時期にワシントン DC に何度か足を運び世界銀行で職を探していたところ、縁あってリサーチアシスタントのような職務内容で契約をいただくことができました。就職にあたっては学部の時にお世話になった先生に内部の方を何人か紹介していただき、そこからフランス語を話せて STATA と R で統計分析ができることを売りにしつつネットワーキングをしました<sup>4</sup>。40 日間の試用期間から始めて何度か契約を更新して現在に至っています。私が担当している仕事は主に家計調査データを使った貧困分析です。仏語圏西アフリカ諸国を担当しているエコノミストたちと分析手法を検討しつつ、担当国の統計局の方と調整しながら貧困指標を計算する作業をしています。これまで経済理論としての知識に留まっていた貧困分析を、実践的にデータを触って学ぶまたとない機会となっています<sup>5</sup>。

私は Yale に在学中 RA をしながら共著論文を書く機会にも恵まれましたし、修士論文を学会で発表するなど、結果的には pre-doc は経験せずとも多少の研究実績を積むことができたと思います。私の経験がロールモデルになるかは分かりませんが、海外での修士課程から PhD 留学を目指す場合には、自分の専攻分野で名を上げている先生方と繋がりを持つように努力すること、トップ校を狙う場合は特に pre-doc を視野に入れること、pre-doc をやらなくてもそれに類する研究実績をアピールできるようにすることが重要な戦略になってくるのではないのでしょうか。海外に早めに出るといふ道筋は、経済学 PhD 留学という視点だけならば少し回り道<sup>6</sup>だったかもしれませんが、むしろこの経歴を今後の研究における自分の武器にできるようにしたいと考えています。

---

<sup>2</sup> 経済学 Pre-doc の募集は NBER の [ウェブサイト](#) または Twitter の [@econ\\_ra](#) で網羅的に確認することができると思います (2020 年 6 月現在)。開発経済であれば J-PAL, IPA, EPoD のウェブサイトでも多く宣伝されています。ビザの sponsorship が出なくても働けることが条件の場合もあるので、アメリカの大学で学位を取得し F1-OPT が使えると可能性が広がるかもしれません。

<sup>3</sup> Pre-doc のポジションは応募しても返事が来ないのが普通と思って出し続けるしかないと思います。私は働きたいと思っていた先生がたまたま Yale に発表で来ていた時にアポを取り、RA のポジションに応募したが返事が来ない旨を伝えたところ、翌日にオンライン面接に呼ばれたことがありました。あまりにも応募が多いときには、アシスタントが書類選考・coding test を担当し、プロジェクトリーダーの先生は最終面接だけ担当する場合も多いようです。

<sup>4</sup> 世界銀行のコンサルタント職でもより待遇の良い Extended Term Consultant (ETC) は公募に出ますが、一般的な Short Term Consultant (STC) は外部から見つけるのが非常に困難です。コンサルタントを探している職員は口コミで候補を絞ることが多いので、内部の人と話をしてお紹介してもらうことが重要です。現職に繋げていただいた方々には感謝してもしきれません。

<sup>5</sup> 世界銀行での経験が PhD への出願に有利になるか、という点については部署と仕事内容に依ると思います。各大学にネットワークのあるエコノミストに推薦状を書いてもらえるような形で勤務することができれば一番効果的だと思います。

<sup>6</sup> 国内と海外どちらが良いかという話は専攻分野にもよると思いますが、コストパフォーマンスという観点では国内の修士課程に分があると思います。個人的には、著名な先生と接点を持つ可能性が上がること、ビザの取得で有利であること (F1-OPT 制度の利用) などの観点からその後のキャリアパスの選択肢が拓けていることが海外修士課程の大きな魅力だと考えています。

## 出願から合格まで

大学院出願に必要なのは主に推薦状3通、SoP (Statement of Purpose)、CV、成績表、writing sample、TOEFL/IELTS および GRE のスコアです。経済学 PhD では以前から推薦状の比重が高く、「何を書いてもらうか」と同じくらい「誰に書いてもらうか」が重要になっているそうです。私の場合、推薦状は Yale で RA をした先生と授業を受けた先生からそれぞれ1通、東大でお世話になった先生に1通お願いしました。その他の書類に関しては前年の出願したセットがあったものの、業績等も変わっていた<sup>7</sup>ため全て大幅に書き直しました。フルタイムで働きながら書類を準備する必要があったので、9月上旬から準備を始め、先輩方・先生方から SoP のフィードバックをいただいて校正を重ねました。

私はヨーロッパの大学<sup>8</sup>にも複数応募しました。ヨーロッパでは伝統的にコースワークが少なく論文執筆中心の短いプログラムですが、近年一部の大学がアメリカ式の教育形式を採るようになってきました。私は自分の関心分野である紛争の経済分析をしている先生方がヨーロッパにもいらっしゃったので、そちらにも応募することにしました。ただ、ヨーロッパの場合は合格者のうち数人にファンディングを提供するものの、大半にはファンディングなしの合格で、資金繰りに苦労する可能性があります。私は財団からの内定を11月時点で頂いていたので、ヨーロッパの大学に出願する際のアピールポイントとして活用させていただくことができました。

そして、ほとんどのプログラムに12月に応募を完了し、2-3月に合格通知をいくつか受け取ることが出来ました。不本意な結果に終わった大学も多くありましたが、個人的には3度目の正直で合格をいただくことができ安堵しています。本来は campus visit をして先生方や学生と話すことになるのですが、Covid-19の影響で全て中止になってしまったことが残念です。代わりに先生方とオンラインでお話をし、PhD 生活のイメージを掴むことができました。ただ、その後のやり取りで秋学期の授業再開見込みが不透明だったこと、直接キャンパスを訪れて自分が研究する姿を思い浮かべることができなかったことから、入学の1年延期 (defer) を決めました。幸いにも現職の上司がもう一年間雇っていただけるとのことので、PhD を始めるまでの期間を世界銀行で更に研鑽を積みたいと思います。今後とも宜しくお願い致します。

---

<sup>7</sup> 参考までに2019年12月時点での私の業績等を参考までに載せておきます。政治学関連の成績・業績は実際の審査の際には考慮されていない可能性が高いです。海外から応募できる奨学金が非常に限られていたので、船井財団(内定)およびJASSO(辞退)にのみ出しました。

GPA : 3.73 (学部総合), 3.86 (学部後期), 3.88 (大学院)

語学 : TOEFL iBT 110 / GRE 155 (verbal), 169 (quant), 4.0 (writing)

奨学金 : 船井振興科学財団

研究業績 : 国際学会での full paper 発表3本 (政治学2本・経済学1本)、査読付き共著論文1本

数学 : Linear Algebra (線形代数) および Real Analysis (解析学入門) を受講、どちらも A に該当する成績。

<sup>8</sup> アメリカの大学と異なり出願料が必要ないプログラムもあり、用意する書類も少なく済む場合が多いので出願しやすいかもしれません。